

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>2006年の部				
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしふ				
作者		岩崎純一				
通釈・語釈		園井長光、長満たき、戸井留子、岩崎純一(自釈)				
作者サイト		http://iwasakijunichi.net/				
和歌ページトップ		http://iwasakijunichi.net/waka/				
詠進年月日	題	2006年の歌会・歌合	通釈	語釈	他歌人欄	
主催: 岩崎純一	歌数:10首 歌人数:1名 自歌数:10首	『海峡十首』(かいけふじつしゆ)			評	派生歌など
2006		日本各地古来の海峡を詠んだものである。 自撰				
2006/3/15	津軽海峡	こごえ果て雪もかたみに降りしきる津軽今はの海の別れ路	こごえきった中、雪も忘れ形見として肩身に降りしきる。津軽海峡は、「では、これで」と人々が別れる、最後の場所である。	◇掛詞 「形見に×肩身に」 ◇歌枕 「津軽」	◆歌謡曲の「津軽海峡・冬景色」の詞と景を凝縮したような一首で、大変美しい。(長満たき)	
2006/3/15	平館海峡	別れむをなどでか胸は平館夜の海より暗き我が身よ	別れようとしている今、どうして胸が穏やかでありますか。平館の夜の海よりも暗い私の身ですよ。	◇掛詞 「平(ら)×平館」		
2006/3/15	浦賀水道	吹き返す袖の浦賀も染み果てぬ旅寝の夢は人の面影	風に吹かれて返る袖の裏側までも、涙は染み果てました。浦賀に旅寝して見る夢には、恋人の面影。	◇掛詞 「裏×浦」		
2006/3/15	明石海峡	旅やせむ昔の人に淡路だに恋ひて明石にかへるはかなさ	尼の旅に出よう、昔の恋人に逢うまいとまで思っていたのに、また恋をして、恋人が迎えに来る明石に帰ってゆく女のはかなさ。	◇掛詞 「淡路(あはち)×逢はじ」 ◇参照 『源氏物語』「明石」		
2006/3/15	紀淡海峡	舟旅の袖吹き返す由良の瀬戸かをりぞおほふ夜の潮風	恋の行方も知らず、由良の瀬戸を舟であてもなく旅する我が袖を返しつつ、海の香りに覆い尽くされた夜の潮風が吹く。	◇参照 「由良のとをわたる舟人かぢをたえ行方もしらぬ恋の道かな」(曾禰好忠『新古今』) 「かぢをたえ由良の湊による舟のたよりもしらぬ沖つ潮風」(良経『新古今』) ◇歌枕 「由良」(若狭、紀伊)		

2006/3/23	鳴門海峡	海なれどいつこの山に響く かな鐘の鳴門の恋の黄昏	ここは海であるけれど、近くのだ の山に、どこのよその男女に、逢 瀬を告げる鐘が響いているのだ ろうか。鳴門海峡を眺める私の恋 は黄昏のように暗くなってゆくけ れど。	◇参照 「年も経ぬ祈る契りは 初瀬山尾上の鐘のよその夕暮 れ」(定家『新古今』) 「えのこ草種はおのれとなるも のをあはの鳴門は誰かいふら ん」(和泉式部)	◆定家の名歌をも とに、鳴門海峡とい う近世的な地の恋 を詠む。(長満たき)	
2006/3/23	備讃瀬戸	敷妙のいづれの岸に我が 身あるや瀬戸の海まで枕流 れて	中国と四国のどちらに寝床を敷い て寝た私だったのでしょ。瀬戸 の海まで枕が流れるほど泣いて、 もはや一面、床の海ですから。	◇枕詞 「敷妙の一枕」		
2006/3/23	尾道海峡	一人旅飛ぶ山鳥の尾道に 海を隔ててなける愛な媛	山鳥が飛んでいる尾道のあたり を一人で旅する旅人。山鳥の雌 雄が、山の峰ではなく、海を隔て て鳴く中、美しい愛(ま)な媛(ひ め)が愛媛の方角で泣く。	◇掛詞 「(山鳥の)尾×尾 (道)」 ◇縁語 「山鳥、尾」 ◇参照 「もみぢ葉のあけのま がきにしるきかなおほ山姫の 秋の宮居は」(今川了俊)		
2006/3/23	来島海峡	年も海も越えて待つとも人 はただいつ来島を知らぬ宵 闇	年も改まり、来島海峡を越えて 待っても、恋人はいつ来るかも分 からずじまいの海の宵闇。	◇掛詞 「来る×来(島)」		
2006/3/23	関門海峡	海の関敷波の門ぞつらかり しかたみに濡れてつかぬ浜 面	波がしきりに寄せる関門海峡の 眺めは、つらかったものでした。 お互いに肩身を濡らすばかりで、 陸の浜どうしが付き合うことはあ りませんでした。	◇対句 「海の関//敷波の門」 ◇掛詞 「互に×肩身に」		
主催: 水垣久	歌数:約1000首 歌人数:約40名 (うち完詠3名) 自歌数:100首	『百人一首唱和』(ひやくにんいつしゅしやうわ)				
2006/4/27 出題 2012/1/2 結題	『小倉百人一首』(13世紀前半)に唱和することとされた。題に付いている番号が、小倉百人一首の各歌に相当する。 藤原定家撰 出題者:水垣久 判者:水垣久・ネット衆議			評	派生歌など	

2009/5/20	秋1	かりそめの人 の心は秋の庵 苦も涙もあ らき月夜に	あなたのほん の仮初の飽 きた心は、 秋の庵のよ う。屋根の 苦が粗くて 雨が降り込 むように、 私の涙も 荒い月夜に 、そう思 います。	◇本歌取 ◇掛詞「仮×刈り」「秋×飽 き」「粗き×荒き」 ◇縁語「仮(庵)、庵、苦、粗 し」	◆秋の風物を恋の趣向に転換するという古典和歌の骨法 ◆下句の大胆な接合表現も鮮やか(水垣久)
2009/5/20	夏2	夏は来ぬ人 待つ天の香 具山にかは りし色や干 すかひも なし	夏は来た。天の香具山で着物を干しながら恋人を待つも、干す甲斐もなく色あせてゆく。私は、貝もない海にいさる海女のように。	◇本歌取 ◇掛詞「天×海女」「甲斐×貝×峽」 ◇縁語「海女、干す、貝」	◆富士も筑波も三輪山も、いにしえの歌人にとっては信仰の山であると同時に恋の山 ◆その流儀に則った ◆非常に面白い趣向の構想 ◆結句にうまく落とし所 ◆初句にやや心残り(水垣久)
2009/5/20	恋3	春の夜の尾の上の闇にながめしてしだり柳にまがふ山鳥	春の夜の闇の中、山の峰に長雨が降るのを眺めていると、しだれ柳かと思える山鳥の尾が見える。	◇本歌取 ◇掛詞「尾×尾(の上)」「長雨×眺め」 ◇縁語「尾、長、しだり、山鳥」「尾の上、山」	◆しだり柳の枝葉と山鳥の垂れ尾の紛れる「尾の上の闇」とは奇観(水垣久)
2009/5/20	冬4	思ひあまり うち出でて 見れどよそ に咲く富士 の高嶺の花 の白雪	思いに耐えきれず、外へ出てみても、遠くに見えるのは、私の手の届かない高嶺の花である女性を思わせて富士の高嶺に降り咲く、花のような白雪である。	◇本歌取 ◇掛詞「高嶺の花×(富士の)高嶺の(花の)白雪」	◆本歌の「うち出でて」の活かし方が巧い ◆富士の姿が美しく想い遣られるだけに、慰められぬ恋心があはれ(水垣久)

2009/5/20	秋5	我が恋は秋の色濃き奥山に 踏み重ねてぞ鳴く鹿の声	あなたに恋文を送っても無駄な私の 失恋の涙は、あなたに飽きられた 気配の濃さを思わせる秋の奥 山を踏み歩きながら鳴く鹿の声の ようです。	◇本歌取 ◇掛詞「秋×飽き」「踏み× 文」「(ふみ)重ねて×重ねて (なく)」「鳴く×泣く」	◆掛詞が生む副旋 律はきわめて控え 目な感じで、むしろ 秋色深まる奥山の 景情がそのまま「我 が恋」のありさまを 印象深く示している (水垣久)
2009/5/20	冬6	年を経て逢ひ見し星の涙か な霜おきまよふかささぎの 橋	一年を経て、七夕にお互いに逢っ た星同士の涙なのですね。霜が 置き乱れる、カササギが渡した橋 は。	◇本歌取 ◇「かささぎの橋」: 中国の七 夕伝説	◆冬の夜空に架け 渡した幻想の橋を、 古歌の名句を借り て幽艶に歌い上げ た一首 (水垣久)
2009/5/20	羈旅7	夢にだにかすかに人を三笠 山頼むる同じふるさとの月	故郷の春日の三笠山に昇ったの と同じ月を見ている現実には、私 に、夢にさえかすかに恋人を見た いと頼みにさせてしまう。	◇本歌取 ◇掛詞「見×三」 ◇歌枕「三笠山」	◆巧緻にして調べ はあくまで流麗 (水垣久)
2009/5/22	雑8	我が庵は遠き辰巳(たつみ) の深川の花こそ咲かね憂し としもなし	私の仮住まいは、遠く辰巳の方 角にある江戸深川の辰巳芸者の ように華やかではございません が、つらいというわけでもございま せん。	◇本歌取 ◇掛詞「(江戸)辰巳×(方 角)辰巳」	◆「憂しとしもなし」 と言われる(中略) 理由? (水垣久)
2009/5/22	春9	ふるながめうつろふかがみ さらぬこと我が身のほかの 花の面影	長雨が降る外の眺め、涙が落ち る私の顔、移りゆく季節、鏡に映 る私の姿、全てが何の意味もあり ません。そんな我が身をよそに、 花のようだった昔の私よ。	◇本歌取 ◇掛詞「降る×(古る・ラ上 二)」「長雨×眺め」「移ろふ× 映るふ」 ◇『玉造小町子壮衰書』『西京 雑記』『今昔物語集』	◆本歌の「ながめ」 から「かがみ」への 意想外の展開が面 白く かつての「花の面 影」の、今の我が身 との隔たりに愕然と する思い ◆小町の壮衰伝説 に、王昭君の物語 が重なってくるかの よう (水垣久)

2009/5/22	雑10	知らざりきこれ朝まで逢坂の関とめあへぬ帰るさの袖	知らなかった。翌朝まで共に過ごしたあと、逢坂の関のようにせき止めることのできない、帰り道の袖の涙を。	◇本歌取 ◇掛詞「逢ふ×逢(坂)」「堰き×関」	◆初めて後朝を経験した男の初々しい恋心 ◆「とめあへぬ」ものが(中略)概念的な理解になるので、やはり何か具象物で暗示した方が艶は増す (水垣久)
2009/5/22	羈旅11	八十島(やそしま)や海女の袂の今日かけて置きまよふ露は我が身なりけり	今日まで多くの島々に海女として漁に出て、袂を濡らしてきたけれど、実際に置き乱れるのは、我が身から出た涙なのでした。	◇本歌取 ◇縁語「袂、かく、置きまよふ、露」	◆生のはかなさに対する述懐 (水垣久)
2009/5/22	雑12	吹き立つな風の音よりも聞かまほし暇(なはて)を帰る早乙女の歌	風よ、吹き立つな。風の音よりも聞きたいのだ。田植えのあと暇を歩いて帰る早乙女の口ずさむ歌を。	◇本歌取	◆節の舞姫を早乙女に、雑の本歌を夏の季に転じて鮮やか ◆早乙女たちの歌声は《鄙》の魅力で、五節の舞姫の《雅》との対照も面白く ◆《夕風の涼しさ》と乙女の歌を競わせたりすると、夏の季感をより活かせた (水垣久)
2009/6/8	恋13	秋は来ぬ袂は露に筑波嶺の峰より積もるもみぢ葉の淵	露の降りる秋が来て、恋人の心にも秋が来ました。私の袂は血の涙に漬かり、恋は尽き、筑波山の峰の紅葉した葉が男女川を流れてきて積もった淵のようです。	◇本歌取 ◇掛詞「秋×飽き」「漬く×尽く×筑」 ◇歌枕「筑波」	◆王朝和歌の華麗さ ◆第四句はやや窮屈な感はある ◆血涙の面影もある「もみぢ葉の淵」の凄艶な美しさ (水垣久)

2009/6/8	恋14	もぢずりの陸奥までも乱れにし梢の色をしのは夏雲	陸奥で織られる忍摺りの着物の模様のように、山道の奥まで乱れ咲いていた桜の色を、偲んでいる夏雲。	◇本歌取 ◇序詞「もぢずりの陸奥までも」	◆春が過ぎて、もくもくと湧いた夏雲に、日本列島を北上した、爛漫の花盛り ◆「もぢずり」「乱れ」を花に生かそうとされたのは、やや苦しい気も ◆荒々しいまでに美しいエキゾチックな桜を想い浮かべるのも一興 (水垣久)	
2009/8/15	春15	誰がためとなくてふりゆく袖の雪我が身のけしき若菜つむまに	誰か良きお相手のためということもなく、時の過ぎるままに私の袖に降る雪、そして、私の容貌。春の若菜を摘んでいる間に。	◇本歌取 ◇掛詞「降り×古り」	◆初句と二句が、三句と四句の両体言の修飾となっている、変調の一首で、面白い。(園井長光)	
2009/8/15	離別16	稲羽(いなば)にはまつよりほかによしもなし二たび峰の別れなりとも	あなたが去ってしまったら、それでも稲羽山の松のように、あなたを待つよりほかにすべはないのです。再びあなたに会えない、金輪際の別れであっても。	◇本歌取 ◇掛詞「稲×往な」「松×待つ」「峰×見ね」 ◇参照「峰に別るる横雲の空」(定家) ◇歌枕「稲羽山」	◆「峰」を「見ね」に転じたのは巧妙 ◆「いなば」を特に「稲羽」と書かれた意図? (水垣久)	

2009/8/15	秋17	ちはやぶるからくれなゐの色に出でて名まで龍田の川くくる袖	どうしようもない恋心は、顔の紅色に表れて、恋しているとの評判も立ち、私の袖は、水を真っ赤に絞り染めにした龍田川のようにです。	◇本歌取 ◇掛詞「立つ×龍(田)」 ◇歌枕「龍田川」 ◇枕詞「ちはやぶる→(神)」	◆論理的な展開 ◆実は定家を始めとする古典和歌の本歌取りも、こうした方程式に則っている場合が多い ◆結句に「くくる袖」と「くくる」の語が意外な活かされ方をしているのが画竜点睛 ◆神の枕詞である「ちはやぶる」を、頭音が同じ「から」の枕詞にされたのは、「千磐やぶる」カ業(水垣久)	
2009/8/15	恋18	住江(すみのえ)の松のうきねによる波は夢より覚めし涙なりけり	住の江の松の浮き根に波が打ち寄せる夢から目覚めると、その波は、恋人を待つ苦しさに泣きながら寝る私の涙なのでした。	◇本歌取 ◇枕詞「住江の→松」 ◇掛詞「松×待つ」「浮き根×憂き寝・音」 ◇縁語「住江、松、浮き根、寄る、波」 ◇歌枕「住江」	◆住吉の名物である松を出し、その「ね(根・寝)」に寄せて、恋歌へと転じた、艶な趣向の本歌取り(水垣久)	
2009/12/10	恋19	難波漚ひとへに漬ちし袖はあれどあらば逢ふ世のふしのみまなし	難波漚のように、ひたすら涙に濡れた袖はここにあって、これほど会いたいの、「人というものは、この世に生きていたらいつか会える」という言い古しの期待も空しく、葦の節と節のような短い間さえ、会うことはないのです。	◇本歌取 ◇掛詞「世×節×夜」 ◇縁語「難波漚、よ、ふし、ま」 ◇歌枕「難波漚」 ◇「あらばあふよの有りもこそすれ」(『八代集秀逸』) 「あらばあふよの春をやは待つ」(飛鳥井雅経『明日香井集』)	◆袖はあれど」と「ふしのみまなし」の対比の狙い?(水垣久)	

2009/12/10	恋20	思ふどち辿る難波のみをつくしされど淡路のわびしさの果て	お互いに恋し合っている男女が、身を滅ぼし合っても探し求める難波淵の滯漂。それでも会わずに終わった。淡路のあたりには、限りなくわびしい景色が広がっていた。	◇本歌取 ◇掛詞「滯漂×身を尽くし」 「淡路(あはぢ)×逢はじ」 ◇歌枕「難波、淡路」	◆歌枕二語は若干執拗だが、「わびしさの果て」が効いている。(園井長光)
2009/12/10	恋21	今は来ず明日も来ずは長月や梢の秋と言ふはうべこそ	今はもう、あなたは来ない。明日も来ない。長月よ。来ずの秋の夜長よ。九月を「長月」とも「梢の秋」とも言う意味が、私には分かりません。	◇本歌取 ◇掛詞「梢×来ず」	◆手の込んだ言葉遊び。皮肉を込めた一首。(長満たき)
2009/12/10	秋22	ありし夜も今は嵐の秋の人に袖と草木はしのにしをれし	あなたが私に飽きて、昔懐かしい夜も今はなく、秋の嵐は吹き、私の袖も草木もとめどなく萎れている。	◇本歌取 ◇掛詞「嵐×有らじ」「秋×飽き」 ◇対句「ありし夜//有らじの飽き」	◆「ありし夜も今は嵐の秋の人に」、何とも美しく言い下された「しのにしをれし」の結句も素晴らしい ◆「袖と草木は」と並べたのがやや造作のない感じ(水垣久)
2009/12/10	秋23	月影のちぢに照り散る花の野辺も明日は一つの冬の枯れ色	月影があちこちに散るように照る花畑も、明日には冬の枯れ色一色である。	◇本歌取 ◇対句「ちぢに//一つの」 ◇参照「見し秋を何に残さむ草の原一つにかはる野辺の景色に」(良経)	
2009/12/18	羈旅24	手向山錦の色にとり合へて夕日を映す旅人の袖	手向けの神のいる山の紅葉の錦の色と調和するように、夕日を映す旅人の袖。	◇本歌取 ◇歌枕「手向山」	

2009/12/18	恋25	さねかづら名にし負ふとも身 にならで絶えし手づるに来 る夜もなし	恋人と夜を過ごせるという小寝 葛。その名も空しく、実が生らない ように、身にもならない。手繰り寄 せる蔓もないように、訪れの絶え た恋人に来てもらえる手がかりも ない。	◇本歌取 ◇掛詞「実×身」「生ら×成 ら」「(葛の)蔓×(来る)手蔓」 「繰る×来る」 ◇縁語「さねかづら、実、生 る、蔓、繰る」		
2009/12/18	雑26	小倉山心あらしの秋の人ふ たたび峰のみち葉の風	私を思う心がなくなった、つれな い人。二度と会えない運命の中、 小倉山の峰の紅葉には、嵐の風 が吹く。	◇本歌取 ◇掛詞「嵐×有らじ」「秋×飽 き」「峰×見ね」 ◇歌枕「小倉山」		
2009/12/18	恋27	黒髪やわきて流るる涙川い つ見る影も寄する波かな	女の黒髪から湧き、黒髪をかき分 けて流れる涙の川。この女は、い つ見ても、波が寄せるように涙を 流していることだ。	◇本歌取 ◇掛詞「湧き×分き」 ◇縁語「黒髪、わく」「わく、流 る、川、寄す、波」 ◇参照「清見瀉波も袂も一つ にて見し面影をよする月影」 (家隆)		
2009/12/18	冬28	さびしさは草を結びし山の 辺の花散里(はなちるさと) の枯れ枯れの冬	寂しさとは、男女の永遠の仲を 願って女が草を結んだ山の麓に ある、その女の住む里にやって来 た、花が散り男の訪れも絶えた後 の冬枯れのことである。	◇本歌取 ◇参照『源氏物語』「花散里」 ◇慣用「草を結ぶ」 ◇掛詞「枯れ枯れ×離れ離 れ」		
2009/12/18	秋29	来ぬ夜半のその折りのごと に散りまがふまた逢ふもい さ白菊の霜	恋人が来ない夜の、その度ごとに 手折っては散り乱れる、また会う 日がいつなのかも知らない、白菊 の霜。	◇本歌取 ◇掛詞「折り(時×折る)」「白 ×知ら(ぬ)」 ◇縁語「折り、白菊」		
2009/12/18	恋30	あかつきや流す涙も尽きぬ とて見れば袂と空の有明	夜が明けそうです、流す涙ももう 尽きました、と言いながら、ふと袖 を見れば涙に映る光、空を見上 げれば有明の月。	◇本歌取		

2009/12/20	冬31	み吉野の里より白き雪なれ や有明の月の面の光は	吉野の里に降る雪よりも白い雪で はなからうか。有明の月の光は。	◇本歌取 ◇歌枕「吉野の里」		
2009/12/20	秋32	水ならばしがらみ越えて行く ものをもみぢの色のたまる 袖かな	もし私が水であったなら、川の柵 を越えるように、あなたとの仲を 妨げる色んなしがらみを越えてゆ けるのに、袖は紅葉のような色の 血の涙がたまつたままです。	◇本歌取 ◇縁語「水、柵、越ゆ、たま る」	◆言葉も口調も歌 意も、極めて整った 一首。(戸井留子)	
2009/12/20	春33	久方の雨に花散る今日の夜 のよその光の春ののどけさ	遙か天の空から降る雨によって 花が散る今夜、光に満ちた春の のどけさが、ただ幻想のうちに思 い出される。	◇本歌取 ◇枕詞「久方の→雨、夜、 光」 ◇参照『桃花源記』陶淵明		
2009/12/20	雑34	今は知らぬ人ならなくに待 つごとにまだ見ぬ夜半の心 様かな	今のあなたは、私が知らない人 ではなくなったのに、あなたの訪れ を夜ごと待つ間、まだあなたに 会ったことのなかった頃の気持ち がします。	◇本歌取		
2009/12/20	春35	ふるさとや人の心も花の香 も静けき今のよそのいにし へ	この故郷を訪れようと思う人も絶 え、花の香りも静かで控えめと なった今日をよそに、記憶の中で 輝く昔の故郷の姿よ。	◇本歌取		
2009/12/20	夏36	宵ながら明け残る月の雲間 より吹く風に揺る夏草の朝	まだ宵だと思っているうちに夏の 短夜が明け、空に残った月を見 せたり隠したりする雲の間から吹 いてくる風に夏草が揺れる朝。	◇本歌取		
2009/12/20	秋37	白玉のつらぬきとめぬ秋な れば涙も散らす露分け衣	紐に貫き止めておかない白玉の ように、露がしとどに散る秋に、野 の草をかき分けて女の元に通う 涙も散らす、男の露分け衣であ る。	◇本歌取 ◇枕詞「白玉の→涙」	◆「涙も散らす露分 け衣」が秀逸 (水垣久)	

2009/12/20	恋38	命とは忘れてありと思ほえど惜しと覚ゆる我が心なし	男の命とは、自分では忘れた頃に女に惜しまれてこそ、その価値を思い出すものだが、それでも、好きな女のためであれば、命を惜しいと思えるほどの我が心はない。	◇本歌取 ◇対句「命、あり、思ほゆ//心、なし、覚ゆ」	◆我が命と心とを対比して、誠意のこもった返歌 ◆こういう歌を返されると、女性の方はまたぐらっと来る(水垣久)
2009/12/20	恋39	深き心しのぶよしなく露しのに散る浅茅生の小野の篠原	人の深い心を懐かしむすべもなく、露がとめどなく散る、浅茅が生え、篠竹が繁る野原。	◇本歌取 ◇対句「深し、浅し」 ◇音「しのぶ、しのに、しのはら」	◆心・ことば、相兼ねて誠に宜しく侍り」と俊成や定家も賞賛しそうな姿の美しさ(水垣久)
2009/12/20	恋40	思ふ思はぬ問はれしほどの色人を我も恋ひてし面影の月	恋をしているのか否かを人から問われた美しい女に、この私も恋していた。今は、その面影を思わせる美しい月が出ている。	◇本歌取 ◇慣用「月の色人」	◆結句は「面影の月」に人を忍んだという余情(水垣久)
2009/12/21	恋41	この恋は袖のみ知ると思ひしを我が名と波の立たぬ日はなし	私のこの恋は、涙を受け止める袖にしか知られていないと思っていましたが、涙の波が立つと共に人に知られて、恋の浮き名が立たない日がなくなりました。	◇本歌取	
2009/12/21	恋42	波越えし末の今なほ松山の袖しぼり干す木々の傾き	波が越えたあとの末の松山の松のように、涙が越えたあとの私の袖であるけれど、松が波で傾くように、我が身が涙で傾くほど、今もなお恋人を待っています。	◇本歌取 ◇歌枕「末の松山」 ◇掛詞「松×待つ」	
2009/12/21	恋43	忘れじよあひ見ぬうちの物思ひ後(のち)の心も知らぬ我が身は	忘れるまい。まだ男女の逢瀬を知らない今の私の思いを。古歌にあるような、思いを遂げた後の喜びがどんなものかもまだ知らない我が身よ。	◇本歌取 ◇対句「あひ見ぬ、うち、物思ひ//あひ見る、のち、心」	◆時の流れと人の心をめぐっての深い思い(水垣久)

2009/12/21	恋44	逢ふことの絶えて涙の今の身にいつしか通れ恋の裏道(うらみち)	会うことが全く絶えて無くなった今の私の身に、いつかは通じてほしい、密かな恋の裏通り。いいえ、通じなくても恨みません。	◇本歌取 ◇掛詞「涙×無み」「裏道(うらみち)×恨みじ」	◆恋の行く末に秘めた決意と祈りが余情(水垣久)
2009/12/21	恋45	あはれいかに身のいたづら寝思ふらむ残る頼みの西の白雲	ああ、私のような一人寝の境遇を、どのように思っているでしょうか。最期の希望である、西方浄土の方角の白雲は。	◇本歌取	◆それにしても「余りなる」表現(水垣久)
2009/12/21	恋46	世の中は楫絶えずとも由良の門の水脈引き(みをびき)もなき夜半の舟旅	男女の仲は、楫が絶えずとも、水先案内なしに夜の由良の海峡を行く舟旅のようだ。	◇本歌取 ◇歌枕「由良の門」	◆本歌の「ゆくへもしらぬ恋の道」を「水脈引きもなき夜半の舟旅」へと承けて、恋の行く末に揺れる不安を心深く、詞つづき美しく(水垣久)
2009/12/21	秋47	人はみな生きてさもしき八重むぐら死なばひとへに風の前の塵	人間というものは、生きていても見苦しい八重葎のようで、死ねばひたすら風の前になすすべもなく散る塵である。	◇本歌取 ◇対句「生く、八重、むぐら//死ぬ、ひとへ、塵」	◆本歌の無常観に焦点をあてた本歌取り「さびしき」と「さもしき」、「八重」と「ひとへ」の対照は痛切(水垣久)

2009/12/21	恋48	身も波もくだけしのちの秋の 浜同じなごりに物思ふ頃	波が砕けた後の秋の浜の余波の ように、我が恋が砕けた後、私に 飽きたあなたへの思い残しに悩 むこの頃です。	◇本歌取 ◇掛詞「秋×飽き」「余波× 名残」	◆比喻でなく我が 身を波と同じものと 見なし、自然との交 感がよりダイナミック ◆「くだけ」の意味 が微妙にずれて恋 の終りを暗示し、波 の縁から「なごり」を 出して前半部とは 対照的にスタティク (水垣久)	
2009/12/21	恋49	飛ぶ蛍屋は消えつつ夜は 燃えあくがれ迷ふ我が心か な	飛んでいる蛍は、屋は消え入りそ うに悩み、夜は思いに燃え、体を 離れてさまよっている私の心なの です。	◇本歌取		
2009/12/21	恋50	玉の緒の短き夜だに契りて よ後々あだに長きいのちに	短い玉の緒のような夜の間だけ でも、契りを結んでほしい。もし結 ばなかったら、後々まで無駄に生 き長らえることになる私の命に。	◇本歌取 ◇枕詞「玉の緒の→短き」 ◇対句「短き、夜//長き、い のち」		
2009/12/22	恋51	下もえは風やいぶきの春の 山になびく雪消のさしも草か な	私の下燃える恋心は、吹き始め た春の風になびきながら、雪解け の野の間から萌え出る、伊吹山 のさしも草のようです。	◇本歌取 ◇掛詞「燃え×萌え」「(風 が)吹き×伊(吹)」 ◇歌枕「伊吹山」		◆知らざりつ春のいぶ きにうちなびく雪消の 草のさしも美しきを (水垣久)
2009/12/22	恋52	暮れて明け昨夜なつかしき 入相の夢に聞こゆる後朝 (きぬぎぬ)の鐘	日が暮れて恋人が来てくれたと 思ったら、あっと言う間に夜が明 け、懐かしい昨夜(こぞ)の入相 の鐘も、今は夢のように聞こえる 後朝の今です。	◇本歌取		◆逢ひ見てのうつつ心 やつきにけむ夢ともわ かぬ明け暮れの鐘 (水垣久)

2009/12/22	恋53	ひとりぬる夜半の嘆きは久方の桂の眉を濡らす川波	一人寝の夜の嘆きは、遥か天高い三日月に流れる桂川の波のように、細い私の眉を濡らす涙そのものです。	◇本歌取 ◇枕詞「久方の→(月)→桂」 ◇歌枕「桂川」 ◇縁語「桂川、川波」 ◇対句「一人寝//(三日月)」		◆うるはしき三日月影もあたら夜の久しくとぢし愁はしの眉(水垣久)
2009/12/22	恋54	忘れじを忘れがたみに我ばかりなしても見ゆる行く末の秋	「忘れないよ」というあなたの言葉を、私ばかりが忘れ難い形見としてみても、もうすぐ秋が来るように、私への飽きが来るあなたの行く末の心が見える。	◇本歌取 ◇掛詞「難み×形見」「秋×飽き」		◆あはれなり忘れがたみの言の葉も色は変はらじ秋来ざりせば(水垣久)
2009/12/22	雑55	滝の音の時めく谷に散るもみぢ絶えて久しき幾年の雪	滝の音が盛んな谷に散る紅葉。そんな景色にも似た人の世の時めきも、今は絶えて久しく、あれから何年の雪が降り積もったであろう。	◇本歌取		◆たぎつ瀬ととどろに落つる紅葉だに姿はらずあらなむ流れ久しく(水垣久)
2009/12/22	恋56	今は限りただ恋しさを思ひ出にこの世のうちは逢ふこともなし	これでもうおしまいです。ただあなたへの恋しさだけを死後の思い出として、この世に生きているうちは会うこともないのです。	◇本歌取		◆思ひ出をしるしに後の世は逢はむ今は限りの言挙げあはれ(水垣久)
2009/12/22	雑57	年を経て童遊びは雲隠れそも忘らるる夜半の月かな	時が経って、子どもの遊びは、雲隠れしたように忘れられてしまった。忘れられたことさえ忘れられ、かくれんぼのように雲に隠れる夜の月よ。	◇本歌取		◆昔べの隠れ遊びも懐かしく影はいづこと雲たづねつつ(水垣久)
2009/12/22	恋58	我が恋は今も有馬のやまぬ風吹き結ぶ露のみなのかげ	私の恋心は今もあります。有馬山に止まらずに吹く風のように。風の中でも結ぶ、猪名の笹原の笹の葉の露のように。	◇本歌取 ◇掛詞「有り×有(馬)」「止ま×山」 ◇歌枕「有馬山、猪名」		◆いにしへも今もありまの和歌(うた)ごころ袖には露のみなのかげ(水垣久)

2009/12/22	恋59	十六夜や袂に宿る影を見て やすらひ明けし東雲(しのめ)の空	満月の少し欠けた十六夜の月よ。満たされない恋心よ。袂の涙に宿る月影を見ながら、寝るのをためらい、あなたを待ち続け、そのまま東の空が明けてしまいました。	◇本歌取		
2009/12/22	雑60	思ふどちふみもい出さずと だえして風のみ渡る天橋立	相思相愛の二人は、どちらからも心を言い出す一步を踏み出さず、恋文も交わさず、途絶える運命にあつて、風ばかりが通い合っている天橋立である。	◇本歌取 ◇掛詞「踏み×文」 ◇縁語「文、い出す(出だす)、とだゆ、渡る」「渡る、橋」	◆お互いに恋の一步を踏み出せなかったあとに、天橋立の実景が残るといふ、寂しさ極まる一首。(戸井留子)	
2009/12/23	春61	八重八重の東のけふに時はありて沈む西日のいにしへの花	今や、京都から遥か遠くの東の京に時勢はあつて、京都は沈む西日の美にも似たいいにしへの花である。	◇本歌取 ◇掛詞「京×今日」 ◇対句「東、今日//西、いにしへ」	◆百人一首を編んだ定家の時代に移せば、鎌倉と京の対比になり、百人一首の歌々こそが「沈む西日のいにしへの花」(水垣久)	◆いにしへの西日をそへてこのへの影もかさなる八重桜かな(水垣久)
2009/12/23	雑62	夜もすがら遠山鳥は影見えず我が身のよそにそらねするらむ	夜通し、遠くにいる山鳥の姿が見えないように、遠くにいる恋人の姿は見えず、待つ私の身をよそに、「君を思っているよ」と嘘泣きしていることでしょう。	◇本歌取 ◇掛詞「空音×空寝」 ◇参照「鶏鳴狗盗」(『史記』孟嘗君列伝)	◆恋歌めかして実は贈答の雑歌である本歌から、御作は本式の恋歌へと本歌取り軽みの魅力という点では本歌と共通(水垣久)	
2009/12/23	恋63	今もただ絶えぬ思ひや伊勢の沖にこの世を捨てて沈む伴舟(ともぶね)	今もただ絶えない私の思いです。伊勢の海の沖に沈みゆく二艘の舟が見えます。せめてこの世を捨てて、あの二艘の舟のように、あの世であなたと結ばれたいです。	◇本歌取 ◇歌枕「伊勢」 ◇対句「(独り)//伴舟」		◆神風もいさむる恋か伊勢の海の沖を深めて思ひしものを(水垣久)

2009/12/23	冬64	枯れ果てし瀬々の朽ち木に雪降りて解けて明けぬる宇治の橋姫	水の枯れ果てた川の瀬の朽ち木に雪が降ったまま、解けずに残っている。恋人との逢瀬もどこかに離れ果て、古き昔となった。寝巻の紐も解けないまま、独りで夜を明かした女よ。	◇本歌取 ◇掛詞「枯れ×離れ」「(川の)瀬×(逢)瀬」「降り×古り」「(雪が)解け×(下着の紐が)解け」 ◇慣用「宇治の橋姫」		◆とけて寝ぬ夜はの涙の氷のみ今はかたしく宇治の橋姫(水垣久)
2009/12/23	恋65	うらみても我が名は波の立つけしきそのほかに浮くみるめだになし	あなたを恨んだところで、私の恋の失敗談の噂は、海の波のように立つ気配です。私の悪い浮き名が立つほかには、波に浮く海藻がないように、あなたに会う目途ありません。	◇本歌取 ◇掛詞「恨み×浦見」「(名が)立つ×(波が)立つ」「見る目×海松藻」 ◇縁語「浦見、波、立つ、浮く、海松藻」	◆「名が立つ」と言うことから波につなが、海辺の景に移した趣向が艶(水垣久)	◆みるめだになみ立ちわぶる海人をとめ袖ほすひまもかひもなごさに(水垣久)
2009/12/23	雑66	人はいさ人やさはれの山が奥にあはれ桜のにほひ立つが花	人の世は知らぬ、人の世に興味はないと言わんばかりに、山の奥に、ああ、桜の花が匂い立っている美よ。	◇本歌取 ◇参照『風姿花伝』世阿弥		◆はなぞ人ひとこそ花ともろともににほふ心を深山桜よ(水垣久)
2009/12/23	雑67	待つことはかひなの枕一人して夢に立つ名も逢ふ夜もなし	独りで手枕をしながら恋人を待っても、甲斐はなかった。夢にも現実にも、立つほどの浮き名さえなく、あなたに会える夜もない。	◇本歌取 ◇掛詞「甲斐無(し)×腕」		◆逢ふことも片への袖と朧ろ夜の月よりほかにしくものぞなき(水垣久)
2009/12/23	雑68	今はただ憂き世の情け長らへず夜半の月のみ心あるかな	今はただ、この世の情趣を感じる私の心は長らえることができず、つらいばかりで、夜の月のみがそれを感じる心の持ち主のようである。	◇本歌取		◆憂きにつけあはれにつけて真澄鏡ころをうつす夜半の月かな(水垣久)

2009/12/23	秋69	神奈備(かむなび)や三室の山に散る錦色よ嵐の風にましませ	神々が降りてくる神奈備山の紅葉が、絢爛たる錦のように、嵐に散る。紅き色よ、嵐の風にいっそう増せよ。神々よ、嵐の風のうちにおわしませよ。	◇本歌取 ◇歌枕「神奈備山(三室山)」 ◇掛詞「増し・増せ×坐しませ」		◆水波に錦をくくる龍田川嵐のまにま色ぞ染め増す(水垣久)
2009/12/23	秋70	さびしさのかるるばかりの花もなしけしき一つの秋の夕暮れ	寂しさが私から離れてゆけるほどの花、改めて枯れるような花は、咲いていない。一面寂しい景色となった秋の夕暮れ。	◇本歌取 ◇掛詞「離る×枯る」	◆「さびしさのかるる」と言い「けしき一つ」と言い、古きを慕いつつ新鮮な表現が素晴らしい(水垣久)	◆夕戸出でて眺めつくさん秋の霜さびし心もかれはつる野を(水垣久)
2009/12/26	秋71	秋風はやがて稲葉の実のちも芦のまるやに吹き渡るらむ	秋風は、このまま稲穂が実ったのちも、芦葺きの山荘に吹き渡っているでしょう。私に飽きたあなたの面影は、このままあなたが去ったあとの寝室の私の身にも、残り続けるでしょう。	◇本歌取 ◇掛詞「秋×飽き」「稲葉×往なば」「実×身」 ◇縁語「秋、稲葉、実」		◆刈り入れを終へし稲田の秋の風芦のまるやは安らかに吹く(水垣久)
2009/12/26	恋72	袖の波音するあだ名変はりなく今も高師の別れ路の浜	今も、袖の涙は高く落ち積もり、私が恋をしているという噂も名高いままです。あなたと別れた高師の浜にも、高い波が立っています。	◇本歌取 ◇掛詞「今も高し×高師」 ◇歌枕「高師の浜」		◆浜千鳥なくね高師の浦波にしぼるもあだの袖の別れ路(水垣久)
2009/12/26	春73	高砂の尾の上の鐘のよその山に霞の奥の後朝(きぬぎぬ)の花	恋人の逢瀬を告げる晩鐘が現実に鳴るのをよそに、すぐにやって来る後朝は、山に立つ霞の奥に夢のような花として、終わりを告げるのである。	◇本歌取 ◇枕詞「高砂の→尾の上」		◆帰るさの花とや人の眺むらん尾上の鐘もかすむ有明け(水垣久)
2009/12/26	恋74	年経ても祈り初瀬の山おろし頼み吹き散る風のはげしさ	年月を経ても、恋の成就を初瀬観音に祈り続けましたが、山おろしの風のように、期待は激しく吹き散ったことです。	◇本歌取 ◇歌枕「初瀬山」		◆山おろしに尾上の鐘も初瀬山ちぎる頼みのつきし夕暮(水垣久)

2009/12/26	恋75	頼めおきし露のいのちに秋は来てさしも知らじのよその草枯れ	私の露のような命に恋の成就を期待させたあなたにも、私への飽きは来ましたね。そんなことも大して知らないという様子で、露の置いた蓬の草が枯れる中、私の悲しみも知らないあなたです。	◇本歌取 ◇掛詞「秋×飽き」「さしも(草)×さしも(それほど)」 ◇縁語「置き、露、秋、さしも草、草枯れ」		◆くれなゐにわが衣手をしめち原さしも露凍て秋は去ぬめり(水垣久)
2009/12/26	雑76	舟人の八重にこぎゆく潮風やひとへに白き雲の浮き波	舟人が舟を繰り返す漕ぐ。舟の進む先には、幾重にも吹き重なる潮風、そして、雲のようにひたすら白い浮き波である。	◇本歌取 ◇対句「八重に、こぎゆく//ひとへに、白き」		◆白妙のひとへに漕ぎてゆく袖を吹きかへず秋の八重の潮風(水垣久)
2009/12/26	恋77	われじとて岩流れ越す瀬枕やあはぬ末なき心和ぎかな	二つに分かれるまいと踏ん張りながら、岩瀬を流れ越す急流。あなたと別れるまいと頑張っ、枕に涙するこの私。流れが一つの川なら、分かれた流れが必ず合流するように、私の恋の涙も成就しないことはないと思って、心を慰めることです。	◇本歌取		◆またや見む波滑(なめ)り越す岩瀬川よどむ末なき流れたのみて(水垣久)
2009/12/26	冬78	須磨の浦幾夜かよひし旅人に千鳥ともしき関のともしび	須磨の海岸沿いを何度も行き来した旅人。「私も飛んでゆけたら」と旅人が羨ましがるとも千鳥も少なく、ただ関守の灯火だけが見える。	◇本歌取 ◇歌枕「須磨の浦」 ◇掛詞「乏しき×羨しき」 ◇音「ともしき、ともしび」		◆友千鳥なきかはす音もともし火の明石大門をいづる舟人(水垣久)
2009/12/26	秋79	雲間吹くさやけき風に秋更けて月もれ出づる影ぞたなびく	雲の間を吹く澄みきった夜風に、秋が深まったことが感じられて、漏れ出てくる月影も風にたなびくようである。	◇本歌取		◆月影ににほへる雲のたなびきになほ光そへ秋風ぞ吹く(水垣久)

2009/12/26	恋80	黒髪の長き心も頼みあへず 乱るる今朝にとくひまもなし	私の黒髪の長さのように、あなたの末長い心は期待できず、髪のように心も乱れている今朝は、髪をとかず余裕もないことです。	◇本歌取 ◇枕詞「黒髪の一乱るる」 ◇縁語「黒髪、長き、乱るる、とく」		◆乱るとも絶ゆること なき黒髪のただひとす ぢに頼めとぞ思ふ (水垣久)
2009/12/27	夏81	ひとたびは見まほしきかな 有明の月に重なる白鳥の影	一度は見たいものだ。有明の月に重なって飛ぶ、白い鳥の影を。	◇本歌取		◆有明をわたる鶺鴒(くぐひ)のひろげうつ羽しろ たへに霜はふりつつ (水垣久)
2009/12/27	恋82	我が涙思ひわびてもなから まし憂きに耐えざるいのち なりせば	私の命が失恋のつらさに耐えきれずに、このまま無くなってくれたなら、どんなに思い嘆いても、私は涙を流さずに済んだのに。	◇本歌取		◆命あらばこそその涙の 玉の緒よ絶ゆとも絶ゆ な思ひわぶとも (水垣久)
2009/12/27	雑83	鳴く鹿はいにしへ入りし人な れや我も道なき山に来ぬれ ば	鳴いている鹿は、大昔にこの山に入った人間が化けたものなのだろう。私も、古歌に「世の中は道こそなけれ」と歌われたのを知りながら、この山に隠遁しに来たのだから。	◇本歌取		◆思ひ入る深草山に 跡たえし人や牡鹿に 化(な)りて啼くらむ (水垣久)
2009/12/27	雑84	この頃の憂しとのみ見ゆる 世の中のむさぼる塵のよそ の我が身ぞ	煩わしいとしか感ぜられぬ昨今の日本の世情よ。私欲を貪るのみで、仏道を逸脱した衆生の塵のような風潮をよそに、せめて我が身は生きようぞ。	◇本歌取 ◇参照「世に従へば、心、外の塵に奪われて惑ひやすく」 (『徒然草』)		◆うつし世は塵にまみ れて吹く嵐かれぬ心の 色ぞしのばむ (水垣久)

2009/12/27	恋85	来ぬ人の閨あけやらぬ夜半の袖にひま洩る月の細き白糸	寢室の扉を開けて入ってきてくれる恋人は来ず、待つ夜はなかなか明けず、少し開けてある扉のすき間からは、一本の細い白糸のような月影が漏れ来て、私の袖の涙に宿っている。	◇本歌取 ◇掛詞「開け×明け」	◆洩れ入る月の光線を「細き白糸」と言って鮮やか(水垣久)	◆ひとすぢに松の戸を洩る月影の片糸にぬく袖の白玉(水垣久)
2009/12/27	恋86	我が涙朧月夜にかこちしをけしき変はらぬこの秋の空	月が霞んで見えるのを、春の朧な霞のせいにしてきた。秋の空には、月は澄んで見えるはずが、春の景色と変わらなかった。本当は、月は一年中、恋人に飽きられた私の涙で霞んでいるのだと知っていた。	◇本歌取 ◇掛詞「秋×飽き」		◆春と秋と思へばかはる色もなし月に物思ふ我が涙から(水垣久)
2009/12/27	秋87	村雨やにはかに落つる真木柱空に太敷くかむとけの声	にわか雨よ。急激に落ちてくる大木の柱のようだ。その柱で天空に巨大な宮殿でも建ったかというような力強い雷の音が響いている。	◇本歌取 ◇枕詞「真木柱→太」		◆かむとけにとどろくみ空たかしらす天の御柱くずれやはせむ(水垣久)
2009/12/27	恋88	かれし今よごとに白き葦鶴(あしたづ)の緑の髪の面影ぞ立つ	今は、白い鶴のいる水辺の葦も、節ごとに白くなって枯れてしまった。貴女も私を離れていってしまった。夜ごと、まだ緑色に育っていた葦を思い出すたび、貴女の黒髪、貴女の面影を思い出す。	◇本歌取 ◇掛詞「枯れ×離れ」「節×夜」「葦×葦(鶴)」 ◇縁語「枯る、節、葦」 ◇対句「白、葦(現実)//白、鶴(現実)//緑、葦(記憶)//緑、髪(記憶)」		◆うちなびく葦のみどりの我が髪も霜ふるよまで恋ひやわたらむ(水垣久)
2009/12/27	恋89	玉の緒の長き忍び音洩れ出でて弱るいのちは散り散りの露	忍び泣きの声は我が身から洩れ続けて、これから弱って、恋い死んでゆく私の命は、散り散りに散る露のはかなさです。	◇本歌取 ◇枕詞「玉の緒の→長き」		◆散り散りの露のちしほの紅と袖に知りぬる忍び音の色(水垣久)

2009/12/27	恋90	白き砂青き松なるけしきゆ 糸雌鳥の名には負はずある らむ	白砂青松の景色だからこそ、松 島のあの島は「雄島」という名で、 「雌島」という名ではないのしょう。 「雌島」とは、私の失恋の血の 涙で真っ赤に染まっている、どこ か別の「赤砂赤松」の島を言うの ですから。	◇本歌取		◆つね見ばや白き浜 辺の青松島千代をし まねと名づけそめけん (をしま物名) (水垣久)
2009/12/28	秋91	さむしるに霜夜かた敷きり ぎりすなほ松虫やなく声は みつ	庭にはこおろぎと松虫が一匹ず つ鳴いている。女も一人、横た わって、恋人を待ちかねて泣いて いる。三つの鳴き声が、寒い霜夜 に満ち満ちている。	◇本歌取 ◇掛詞「松×待つ」「三つ× 満つ」		◆我がために啼けや 松虫秋の野と荒れにし 庭に霜を片敷き (水垣久)
2009/12/28	恋92	我が袖は潮干に拾ふかひ あらで満ちても浮かぶみる めだになし	潮干狩りできるような貝も見当た らない。満ち潮になっても、浮か んでいる海藻も見当たらない。私 の袖も、涙が引いてもその甲斐な く、涙にせっかく満たされても、恋 人に会う目途もない。	◇本歌取 ◇掛詞「貝×甲斐」「海松藻 ×見る目」 ◇対句「干、拾ふ、貝、甲斐 //満、浮かぶ、海松藻、見る 目」		◆くりかへし潮干潮み つ岩の間のみるめに よれるかひもありなむ (水垣久)
2009/12/28	羈旅93	綱手縄(つなでなは)たぐる ゆるぶの苦しさに我が身知 らなむ思はくの海人	小舟の舳先につながれ陸から引 かれている綱が張ったり緩んだり するのに似た、私の片想いの苦し さを、あなたに知ってほしい。陸で 小舟を引っ張る人の苦しさを、小 舟に乗る漁師に知ってほしいよう に。	◇本歌取 ◇枕詞「綱手縄→苦しさ」		◆綱手縄くるしき手汗 しみなれて猶つなぐ世 や朽ち果つるまで (水垣久)
2009/12/28	秋94	人は来ず秋は砧の音さえて 身はふるさとの寒きうつせ み	訪問者もなく、自ら衣を打つ砧の 音の響きだけが冴え渡る故郷の 秋です。寒さの中、我が身に年月 ばかりが過ぎてゆくことです。	◇本歌取 ◇掛詞「古る(ラ上二)×古 (郷)」		◆うつせみの声たえは てて深き秋きぬたうつ なへ風は冴えつつ (水垣久)

2009/12/28	雑95	墨染(すみぞめ)を浮世の民におほふともことぞともなきたそがれの道	このつらい世間を生きる民たちを墨染の僧衣で覆ってやったとしても、そんなことで真の仏道が達せられるわけがなく、今や仏道は、黄昏時のように沈みゆく時代なのである。	◇本歌取		◆冥きより冥きに入らむこの道の行末照らせ山の燈火(水垣久)
2009/12/28	雑96	咲きし夜の月の光の花匂ひ嵐の末の雪残る庭	花々が咲いていた春夏秋の頃の夜には、月の光に照らされ、花々は匂い立っていた。今や、冬の嵐が吹き、残るは庭一面の雪である。	◇本歌取		◆風やみし庭のあは雪けぬがうへに沈み果てたる月ぞにほへる(水垣久)
2009/12/28	恋97	夕風は藻塩の我が身消しあへず人をまつほのうらみあまたに	夕風は、焼かれている藻塩にも似た私の恋の火を消すことはできません。松帆の浦で海を何度も見ながら、来ないあの人を待ち焦がれて、恨みまでたくさん募ってしまいました。	◇本歌取 ◇掛詞「松×待つ」「浦見×恨み」		◆藻塩垂れわぶる我が身の夕しぐれ煙はなほもくゆりたちつつ(水垣久)
2009/12/28	夏98	夕暮れや櫛の葉守のしるしとて心ある風のそよぎそむらむ	この夕暮れの風がこれほど秋の自然美を分かっている様子であるのは、櫛の葉を守る神の靈験として吹き始めているからであろうか。	◇本歌取		◆色づきてやがて散るべき櫛の葉の秋を告げつつ風やそよ吹く(水垣久)
2009/12/28	雑99	誰彼(たれかれ)ををしうらめしは常なれど人やりならずするがよかなり	あの人可愛い、この人が恨めしい、と思うのが我々の常であるが、そのような他人評価は、周りの人々の意向によらず、自分でやるのが良いのである。	◇本歌取		◆憂し辛し憎し恨めしつれなしも人を思ふゆゑのわれのまごころ(水垣久)

2009/12/28	雑100	いにしへの草の縁(ゆかり) をしのぶ夜の袖あまりある 軒の玉水	古き良き時代の人々とのよしみを 軒の忍草に偲ぶ雨の夜、袖に は、軒から美しい玉のような雨水 が余るほど落ち、私の涙も余るほ ど落ちている。	◇本歌取 ◇掛詞「忍ぶ×偲ぶ」		◆紫のしのぶゆかりは みながらにあはれあま らむ軒の玉水 (水垣久)
------------	------	---------------------------------------	---	--------------------	--	---